

☆道徳の授業づくり☆

第5回は、道徳の授業づくりと授業方法についての研修でした。講師の先生は、四天王寺大学准教授の杉中康平先生です。冒頭で『道徳授業の準備はできていますか?』と軽いプレッシャーをかけられたものの、杉中先生の手法に、慎重だった先生方も活発に挙手、発言するようになり、終始和やかな雰囲気にも包まれていました。最後には模擬授業を実践いただき、すぐに使える技術を身に着けることができました。研修のみならず、各校へ持ち帰り、学級、学年での道徳教育を発展させて下さい。

道徳の授業をする中で、子どもたちに気づかせたい『心』を中心発問等で問いかけようとしていました。しかし、まだ力不足で子どもたちが十分に気づけていなかったかなと思います。子どもたちにも『自分と向き合う時間』というキーワードを道徳の時間は伝え、共有してきました。今日学んだことを活かして今後も取り組んで行こうと思います。

道徳が特別の教科になり、評価も始まるということで知らず知らずのうちに道徳に対して苦手意識を持っていました。1学期の授業でも発問などにとっても困りました。発問であったり、場面分け、ビフォーアフターに注目すること、子どもたちへの聞き方などすべて勉強になり、2学期の道徳が楽しみになりました。

今日の講義を受けて『こんな風に本音の思いが言い合えるような授業がしたい』と感じました。少時的外れの答えが返ってきて否定せず、全体で考えを深めていくことができたなら良いんだなあと思いました。苦手意識があり、漠然としたイメージしかなかったけれど、今日こんな風に進めるとおもしろい!とすっきり何かがおちました。

発問は詳細な『答え』を出すためのものではなく、一人ひとりの『本音』が答えとして出るように考えて問わなければならないことに気づくことができました。

杉中先生は、「豊能地区の先生は賢いですね!」と誉めてくださいました。嬉しい限りですね。悩みながら、試行錯誤しながらの1学期だったと思いますが、自信をもって2学期からの授業づくりに活用ください。なんで?それで?は子どもたちの考えや学びを深める合言葉です。

1学期の自分の授業を振り返り、児童が主人公になりきって追体験をし、自分のこととして捉えるような授業ができていなかったな、と反省しました。中心場面の大切な部分にしぼって発問を考え、否定せずに聞くことで、あんなに深まるのだなとわかりました。

担当外で道徳の授業を担当することが今年はないですが、一番大事な部分をしっかり深めていくような授業ができるように勉強していきたいと思いました。

これまで道徳で読み物資料を扱うときには、主人公の気持ちや考え方が変わったところを中心発問にすると学んできたため、それを意識して考えてきました。しかし、それが、ねらいに迫りやすい部分と遠回りになる部分があると学びました。ストーリーの理解を支えるために絵などの視覚的支援が有効なことを実感しました。

杉中先生のみなさんの学びを可能な限り深めたいという情熱と、みなさんの研修に向かう真摯な姿勢から生み出されたものです。主体的、対話的で深い学びを、体感していただけたことと思います。

『心』と『行動』の二つの面から考えていけばいいということがわかりました。道徳の内容項目も自分の学年だけでなく全体を見通して教えないといけないことに気づけました。

ナポレオンの有名な言葉を思い出しました。『心』が変われば『行動』が変わる・・・という文です。子どもの心は急に変化しますが、こちらが力技で変化させるものではありません。自らが変容するように働きかけなければならないと思いました。そして、その変容があつたら行動もきっと変わる。いろんな価値観や視点に触れて気づきが持てるようにしたいです。